浄土宗西山禅林寺派
潮音寺だより
第329号
平成23年3月
電話 052-671-4831
ファックス 052-671-4856
choonji@aichi.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/　ナモの寺 検索
〒456-0034　名古屋市熱田区伝馬一丁目 10-11

花知一様春

【出典】『禅林句集』五言対句に「月知明月秋、花知一様春」（月は明月の秋を知り、花は一様の春を知る）とあり、注に「月花無心自不違其時言知作意也」（月花無心なるも自ら其の時を違えず知ると言う作意なり）とある。出典不詳。

ときに
麗らけき春
温もりと
生気みなぎる
春とは如何？

咲く花に
問うてみても
花は
芳しく香り
ただ静かに
佇むのみ

春を誘い
春を装い
天地いっぱい
春を供する

花ぞ知る一様の春

花知一様春

相撲は国技として親しまれてきましたが、その角界に、激震が走っています。力士の野球賭博疑惑に端を発し、押収された携帯電話のメールから、八百長相撲が行われていたという確たる証拠が見つかってしまったからです。

相撲道という言葉があります。相撲は、長い歴史の中で、一つの完成されたスタイルというか形態が出来上がっています。お相撲さんという体型しかり、大銀杏と呼ばれる髷・化粧まわし・相撲文字、あるいは、土俵入り・四股・手刀といった所作、あるいは、のぼり旗・明荷・雪駄といった小物に至るまで、計算し尽くされた美学と伝統の上に成り立っているものであります。ですから、相撲は単なるスポーツとは違い、華道・茶道・書道にも通ずる肉体の総合芸術、まさに相撲道なのであります。

今回問題となっている八百長は、勝負事で、真剣に争っているように見せながら、前もって示し合わせたとおりに勝負をつけることをいいますが、実は、相撲世界から生まれた言葉です。

相撲会所に出入りしていた八百屋の長兵衛、通称八百長という人が、ある相撲の年寄と碁を打つ際に、ご機嫌を損ねては商売上うまくないと、巧みにあしらって常に一勝一敗になるように手加減したところからきているそうです。

おそらく当初は隠語として使われたのでしょうが、「八百長相撲」がれっきとした言葉として、辞典にも掲載されている昨今では、語源は今ひとつ定かではありませんが、それに代わる言葉しては「注射」、対して、真剣勝負のことは「ガチンコ」というのだそうです。

してみると、金銭の授受の云々ということは別として、対戦力士双方がうまくいき、観客にも面白い取組というものが、八百長という方法で提供されてきたとしても、それはありえないことではなく、むしろ、あると見た方が自然なのかもしれません。しかし、それは、けして表面に出ることはなく、いや、出してはいけない、相撲道の秘めたる奥義だったのではないでしょうか。

『**風姿花伝**』（俗に『花伝書』）という能楽について書かれた書物があります。世阿弥が、父である観阿弥の口述した能楽論を中心に、世阿弥自身がその思いを記したもので、能楽の修業・演出など幅広い内容に及びますが、つまる

ところ、芸上達と興行を成功させるための方法論を説いたものといえます。その中で有名な言葉として、「**秘すれば花なり。秘せずは花なるべからず**」があります。

ここでいうところの「花」は、とりあえず「奥義」と解するとして、具体的には、世阿弥自身がいう「花と面白きと珍しきと、これ三つは同じ心なり」ということになりましょう。つまり、観客の感動を呼び起こす芸の魅力・面白さ・珍しさは、秘めたるものでなくてはならないというのです。

このようなことは、能楽だけのことではなく、相撲世界にもあるのではないでしょうか。実は、仏教の世界にも存在します。一例として、説教師の隠し業に「袈裟落とし」なるものがあります。

器量よし、声もよし、人気の説教師が、朗々と話を盛り上げたところで、信者に向かって、ハラリと袈裟を落とす。すると、その信者は有り難がって、その袈裟にお賽銭をつけて控え室に返しにいくという寸法であります。

手品と一緒で、種を明かせば、なんと姑息な手段と思うかもしれませんが、観客を感動させるためには、手を替え品を替え、秘めたる業があるものなのです。ただし、それは、あくまで見る者、聞く者に感動を与えるための業であって、秘めたるものでなくなった時点で、それは「花」ではなく「まやかし」となるのです。まして、不正のために、金銭の授受が伴うようなものであってはならないことは明白であります。ですから、今回の八百長問題にしても、その一点においては徹底究明してもらいたものです。

「**花知一様春**」（『禅林句集』花は一様の春を知る）という禅語があります。花は無心ではあるが、時節をけして違ることなく咲き、春を誘い、春を装い、花は春そのものであり、花こそ春を演ずる主人公といえます。

花が春を演じ切れるのは、春の本質を知るがゆえであります。三寒四温、ときには春嵐もあるのが春です。そこで、春を、理想社会と置き換えてみた場合、けして全部が全部、温々したものではないということです。酸いも甘いもすべてを知り、そこでなお、芳香を放ち咲く花の周りが春なのです。

「八百長」、なんとも嫌な言葉ですが、見ようによっては、これも花となり、春を演ずる立役者なのかもしれません。

◎行李（こうり）

「行李」の李は理でもあり、吏にも通じる。すなわち、「（ある場所へ）行き、事を理（おさ）める者（吏）」が本来の意味であり、これを単純に解釈すると、使者ということになる。

もっとも、現代ではこのようなニュアンスをこめて行李の語を用いるのは、禅宗の世界にしか残っていない。禅宗では、行李を「行履（あんり）」ともいう。つまりは、日常いっさいの行為のことを指し、実践を意味しているのだが、これには仏の使者の行い、というムードが漂っていると解釈していいだろう。

さてこの精神的な意味合いをもつこの語が、なぜ味もそっけもない、一物体を指すことばとなったのだろうか。実はこれも、知ってしまうと味気ない。使者は、旅行をしなければいけない。当然、旅の必需品を納める道具が必要になる。そこで、使者である修行僧（特に中国、日本）の用具を入れる器は、単純に行李と呼ばれるようになったというのだ。

しかし『正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）』には、行李を見れば、その人間がわかる、修行が本物かどうかがわかる、ともある。行李は、物を納めると同時に、僧にとっては心を納める器でもあったようだ。

この行李も、現在ではほとんど見られなくなった。柳で作った「柳行李」、竹で作った「竹行李」は、運搬にも便利で風通しもよく、衣類を納める用具としては最適だったのだが……。なお、竹行李の一つとして「頭陀（ずだ）行李」なるものも存在していたが、これなど、仏教と行李のかかわり合いを示す語としてとらえていいだろう。

（『仏教のことば』早わかり事典）

雑記

▼春彼岸施餓鬼会

恒例、春彼岸の施餓鬼会が勤修されます。皆さまお揃いで、お参り下さいますよう、ご案内申し上げます。

◎期日　三月二十一日（月）

◎時間　一時半～二時半位

▼カラス

カラスのゴミ散らかしには閉口します。ただ、カラスにも好き嫌いがあるようで、特に、脂（あぶら）っこい物、肉類やマヨネーズなどに反応するようです。野菜やご飯は食べないとか。

◆姫（ひめ）は這（は）い坊戯（ぼうたわむ）れて雛（ひな）飾る　沐魚